

巻 頭 言

財団法人高輝度光科学研究センター
副理事長 放射光研究所長 吉良 爽



SPring-8 は2002年の11月で供用開始から6年目に入り、世界一の性能のビームを生かした成果は急激に増加し続けています。ビームラインが順調に建設され、それに付随する実験装置の建設も終わり、いよいよ利用が軌道に乗ってきて、SPring-8の優秀さを生かした成果の収穫が本格化したと言えます。また大きな故障も無く機械が動いていることもこれに大きく貢献しています。2001年秋から2002年夏にかけて、政府の委員会によるSPring-8の総合評価が行われましたが、その中間報告の中でも、建設期が終わって本格的利用期に入ったという認識が示されています。

しかしながら、SPring-8を取り巻く社会情勢は厳しくなっています。ご存知のように、SPring-8は日本原子力研究所（原研）と理化学研究所（理研）が共同で所有し、高輝度光科学研究センター（JASRI）がこの二者の委託を受けて維持、運営をしています。原研と理研は、いま政府が進めている特殊法人の改革の対象となっています。その改革に伴う予算の削減等は、当然SPring-8の運営にも影を落としています。2002年度予算において、特殊法人予算の一律削減が行われ、それによる運営費の減少の補填をタンパク3000プロジェクトに仰ぐという緊急処置を講じましたが、結局この体制は一年限りではなく、2006年まで続くことになりました。

2002年度は、SPring-8が学術研究と産業利用を両輪として発展する基盤が固まった年度であったといえます。当初遅れ気味だった産業利用の支援は、2001年の春にその対応のための組織替えをして以来、順調に伸びてきています。2001年度後半には、産業界の新規利用を促進するためのトライアルユースが補正予算で実施され、新しい分野の企業が参入してきました。トライアルユースは2002年度の本予算化が間に合わず、2003年度から3年間の予算化が行われました。高度な産業利用に関しては、これまでも結構成果があったにもかかわらず、社会への周知が不十分であったと言う気がします。更なる発展のために、学術研究者や施設が核となって高度な産業利用を牽引するような利用法の導入を考えています。

なお、利用成果のハイライトは、Research Frontiersという冊子として出版されていますので、それを参照していただければ幸いです。